

An abstract painting featuring bold, expressive brushstrokes. The composition is dominated by a dark, textured background. A large, bright white, cloud-like shape is positioned in the upper right. Below it, a series of blue, circular motifs with red centers are arranged in a diagonal line. A thick, orange diagonal band cuts across the middle. In the lower left, there are vertical stripes of orange and white. The overall style is reminiscent of mid-20th-century abstract art.

輝く日の宮

丸谷才一

く日の宮

丸谷才一



講談社

輝^{かが}く日^ひの宮^{みや}

2003年6月10日 第1刷発行
2003年7月10日 第2刷発行

著者 丸谷才一^{まるや さいいち}

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二―二／郵便番号112-8603
電話 文芸図書第一出版部(〇三)五三九五―三三〇四
書籍第一販売部(〇三)五三九五―三六二一
書籍業務部(〇三)五三九五―三六一五

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。



本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社書籍業務部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸局文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

© Saitchi Maruya 2003, Printed in Japan

輝く日の宮

装画装丁
和田誠

花は落花、春は微風そよかぜの婀娜あでめく午後、純白の水兵服うはぎの上衣えりに紺あじの袴しゆす子のタイふうはりと結んで、プリーツ寛ゆたけくつけた紺のスカートの娘、三番町の路みちすたくと歩み来きたつて、小ぶりの門に松寓まつぐうと表札のある二階家へ。迎むかへ出た婆やが、制服の肩の花びら二つ三つ摘つまみ、ちらくちと宙ちゆうに舞はせ、

「まるでお芝居の雪。」

と呟つぶやいてから、

「お帰りなさい、真佐子様。図書館はお目あての本、ございましたか？」

と問ひ掛け、答へる暇いとまもあらばこそ、

「さうく、さつきお使ひが……」

と差出せば広やかな玄関の薄闇に角封筒の白ほのか。

「郵便屋さんぢやなくて？」

「はい、小さな男の子。片眼に黒い眼帯をしてましてね。飛んだ海賊気取り。」

「おや、誰かさんと同じ好み。」

と調戲つたのは婆やの宝物が真佐子の読み古しを拝領の『宝島』で、就中、片足のシルヴアーが大のお気に入りだからである。

受取つた封筒の所書と宛名をちらと見たきりで、娘が仄暗い階段を昇り、天窓から四角く、しかし櫟の葉叢に妨げられつつ滴り落ちる乏しい光で確かめると、やはりその涼しい筆蹟は中橋一馬のもの。すうりと丈の高い男の面影思ひ浮べながら六疊の部屋に入り、封を切ればザラ紙に、

真佐子様

漸く時間が取れました。

この世の名残に一度お目にかかりたい。ぜひいらして下さい。

五時、麴町郵便局の奥の方テレビのある辺。簡易保険、年金の前の椅子。

屹度出向きますからお待ち下さい。

中橋一馬

と凶々しい言葉まじへて、胸の痛くなる走り書。しかも先日書き送った便りのことは一言も触れてゐない。母なる人に電話をかけたときのおろおろ声の応答では、

「戻りましたら渡しませう。」

とのことだつたのに。とすれば己おのれの家に久しく立ち寄らぬ日々なのか。

抑そもくこの若者は父の親友の息子で、幼いころから顔見知りの間柄。とりわけ去年は一度は音楽会に一度は歌舞伎へ、二人で行き、これはもちろん嫌ひではない暗標しるしだけれど、口づけ一つしたことのない仲なのに、去る正月、唐突だじゆけに便りがあつて、婚約を破棄したいと寝耳に水の文面。真佐子が驚いて母に質問たづねすると、

「お前に言はずにそんな約束をするのですか。江戸時代ではあるまいし。」

とのことだつたし、父に問へば婚約話のことに無言のまゝ大きく頭かぶりを振つた上、暗然たる面持おももちで、

「赤くなつたので心配だと言つてゐたが……叛徒はんととかいふ仲間と聞いた。」

と長大息し、

「許嫁いひよめの件は何かのせいで妄想だが、それを取消さうといふのは何か物騒なことを企てゝゐるために相違ない。」

と憂ひ顔で臆測するのであつた。

すなはち某大学の学生中橋一馬は極左の一員として活躍中の身で、叛徒は一方ではアヴァン

テイなる組織と血で血を洗ふ抗争をつゞけながら、言ふまでもなく国権と闘ふ立場である。危
ふい日々の連続であらうし、これを逃せば再度の機会はないかもしれない。婚約話の思ひ違へは
ともかく、親しい仲で、心の底では恋しい男。可笑な比喩と我ながら思ふがトーストのやうに
旨さうな男くさい匂ひの仄かにする若者で、上野文化会館でも歌舞伎座でもその匂ひに包まれ
たことの幸福を懐しく思ひ出す。その者が一期の願ひとあればどうしてこれを否めよう。然も
指定の場所のごく近間。少女は瞬時にして心を決め、衣裳を改め、想ふ男と逢ふのだもの、生
徒心得では御法度の化粧念入りにすませ、母のお下りのハンドバッグ、赤い布の小意気な品を
取出した。

そして本棚の一番上、文庫本の前にずらりと並ぶ、木製三輪連結の列車、紫のスカートのカ
ンガル、白い陶器の仔象、銅細工の茸と栗、コカコーラの広告横にめぐらす赤い二階建ての
バスなど、玩具類の端にある赤いポストの貯金箱の底をあけて、硬貨いくばくと紙幣の悉皆
をこれもお下りの財布に収め、ハンドバッグの仕切りの一方へ。他方にはハンカチとごく薄い
文庫本『高野聖』。さらに考へ直して口紅一本とコンパクトをもその横に添へる。

階段を降りると婆やが、

「おや、お出掛けですか？」

「ええ、ちよつとそこまで。」

「お三時も食らないで……、」

「すぐに帰るもの。でも、ひよつとすると遅くなるかもしれない……、」

「お父様とお母様は芝居にお招ばれですから、なるべくならお二人より早くお帰り下さいませ。」

とやはり釘をさしてから、

「まあ、おめかしをなさつて……、」

と婆やは驚く。真佐子は笑つて、

「お化粧の真似事ね。」

「お気をつけて。」

「はい。有難う。」

紺のジーンパンに黄色いセーター、白いスニーカーの十五の娘は、右手に華奢なバッグを下げて黄昏の間近い街へ、千鳥ヶ淵の染井吉野の花びらが微風に舞ひ、風に運ばれた揚句、天からしきりに零れつゞける路へと歩み入る。

春、午後五時の麴町の本局は、入口に近い切手、葉書など郵便事務のいくつかの窓口には少しく客があつて、小さきまぐの小包を出したり、色とりどりの切手を買ひ求めたりしてゐるが、貯金、為替、振替の窓口五つ、そして真佐子が行き着く果ての簡易保険、年金の窓口一つには局員もみず客も見えず、閑散の極み。突き当りのテレビが音を消して映しつゞけてゐる画面を横に見て、娘は二列並ぶ水色の椅子の一つに腰掛け、バッグから取出した鏡花の作は膝に

載せたまま、四囲を見廻して、窓口の向う遥か彼方で二三人が薄暗く働くのは何をしてゐるのかしら、これは京都府、これは湖のある滋賀県、これは神戸と明石の兵庫県などと郵便物の仕

分をしてゐるのかしらなどと考へたが、やがて左手手前の小さな扉と左手遠くの大扉とにちら／＼と視線を送る。そのいづれから待ち人は忽然として現れる筈と思ひ込んだ故である。

然し、予て定めた五時を過ぎても五時半になつても中橋一馬はあの容子のいい姿を見せない。四十分近い頃、手前の扉から中年女がはいつて来て、花見酒に浮かれてか、何か鼻歌を口ずさんで、こちらを窺ひ、いきなり身を翻して出て行つた。五十分頃、背広にネクタイの老人が大扉のほうから歩いて来て、テレビのチャンネルをあちこちと忙しく廻し、音を消して立ち去つた。

六時すこし過ぎ、真前の13番簡易保険と年金の窓口の奥に肥つた中年者が影の如くに暗く来て、うつむき、書類をひろげて調べ物に余念がない。それを淡く意識しながら、真佐子は文庫本の頁を繰る。汽車は北国空の下を、薄曇の米原、雨の長浜、柳ヶ瀬に進み、白いものがちら／＼と落ちて来て……やがて小止なく降る雪の敦賀に着かうかといふ時分、どこかで遠く、「松真佐子さん……、」

と呼ぶ声がする。車中の身が、思はず、

「はい。」

と答へて見廻しても誰もゐない。怪訝な顔で文庫本を持つたまま腰を浮かすと、なほも、

「松真佐子さん……、」

と呼び掛けたのはすぐ前の窓口の男で、その手には何やら茶色い紙がある。近寄つて行つて、無表情のまつたく事務的なその者から、右肩に小さく鉛筆で汚点しみの如くに娘の名を記した封筒を受取り、席に戻つて中を改めれば、

松真佐子様

申し訳ありません。事情があつて変更しなければならなくなりました。7時、上野の寄席よせ鉛本。落語は聞かずに客席横のロビーで待つていて。

中橋一馬代筆

と本人の筆蹟てとは似ても似つかぬ悪筆の擲なぐり書がき。

真佐子は、彼の属する組織はこんな所今まで喰ひ入つてゐるのかと驚くよりも寧ろ誇らしく感じ、然し一方、数多あまたの障害にも屈せず別れの言葉を告げるため逢ひたいといふ男心にほつと吐息をついた。この十年、新左翼の活動によつて血なまぐさい事件がつゞいてゐるのに、不思議なことに今、彼女の心には恐れも怯おそえも疑ひもなく、たゞ、恋しさとそれから男の願かねひを叶へてやりたいといふ思ひがあるばかり。黄色いセーターの娘は指定の地点へ赴かうとして、まさに宵闇の訪れようとする市ヶ谷の巷へ寂然ひっそりと溶け込んで行つた。

上野の駅から某横町なにがしの雑踏目近まぢかく見て少しく先、左に折れて暫しばらく進めば鈴本演藝場と大書したのが眼に跳込とびこんだ。その真下には入口の両脇に、一つは水色、一つは柿色の幟のぼりを立

て、客を迎へる。真佐子が黙つて金を出すと、窓口の女は、

「娘さん、学生さんでしょ？」

「ええ。」

と点頭^{うなづ}けば、学生證を見せてなんて野暮^{やば}は口にせず、学割にしてお釣りを差出す。

「有難う。」

「いゝえ、どう致しまして。」

と、につと微笑^{ほほえ}むのが下町氣質^{かたぎ}。

セーターとジープンの少女はまづ二階の売店で稲荷^{いなり}ずしと海苔^{のり}巻の折詰、それにお茶を求め、思ひ直して、

「あの、もう一箱。」

と含羞^{はぢら}ひながら言へば、これは五十がらみの和服の女が、

「若いんですもの、ねえ。」

と優しく慰撫^{いたは}つてくれる。

三階の狭いロビー、指定通り客席の横の、誰もゐない椅子に腰かけて弁当を使ひ、時計を見るとまだ七時までには少許^{すこし}あるので、端の席で聞くことにした。円馬といふ胸元をはだけた着こなしの粹な年寄りが、上手いやうな下手なやうな口調で質屋の倅と船宿の娘の咄^{はなし}を語つてゐるが、佳境に入り掛ける所で、ここで聞き惚れてはいけないと用心し、ロビーに戻る。落語

のつゞきと客の笑ひ声を耳にしながら、がらんとしてゐる四囲を見廻し、早く一馬が来て、並んで聞きたいなどと思つてゐるのに、円馬が下つても待ち人は来らず。次の落語家が終つても姿を見せない。叛徒の会議がもめてゐるのか、アヴァンティに襲はれたのか、それとも公安警察の待伏せかと案じてゐるうちに時は経つて、八時ごろに中入り。どや／＼と出て来た客のうち何人かが煙草を吹かすのに囲まれながら、このなかの誰かが耳許に口を寄せて何か囁きはせぬかと思つたが、期待は虚しく、暫くすると皆なくなつた。万才が始まり、藝人の機嫌を取るやうに笑ふ客席のどよめきが海鳴りめいて遠く聞える。娘がバッグから文庫本を取出しかけたとき、案内係の女が突然脇に立つてゐて、

「松真佐子さん。あなた松真佐子さんですね。」

と話し掛け、

「今、事務所に電話ありましてね、これですつて。」

と渡されたメモ用紙には、「9時 テプテプ麻布十番」とあつて電話番号と所書を記し、追書の態にて、「下に迎車」とあるのは何のことやら。少女はこのとき初めて、全ては何か性の悪い悪戯ぢやないかしらと疑つたが、それは一瞬のことに過ぎず、直ちに打消して、何しろ彼は危険の渦中にある身、奇異なことの起るのは寧ろ当然だし、それに近頃は若い女が指揮して仲間を大勢殺めたり、大学教授が大学解体を主張したりする時世だもの、事が順調に運んではかへつて変、是式のことには怯んでなるものかと己を励ましたが、念のため赤電話を探して、

テプテプ麻布十番に、どう行けばいいのか教はつたのは、様子を探らうといふ下心。然し店の者の受け答へも、その背後のざわめきも、何の変哲もない喫茶店の趣である。

迎^{むか}ひの者は直^すに知れた。演藝場の入口、真中に立つ男の子、父か兄かのお下がりの革のジャンパーにジーパン、そして何よりも黒い眼帯の目立つ奴、あの急ぎの文の使ひだつたに相違ない者が、こちらを見張つてゐる。

「松真佐子さんですね。」

とまだ声変り前の声で語り掛け、

「はい。」

と言ふと、

「さあ出かけませう。」

と先に立つて、道に駐めてある時代物の、然し手入れのよい飴色^{あめ}のルノーの扉を開けてくれる。その子供がハンドルの前の席に腰掛けるのを見て、真佐子が驚き、

「まあ、あなたが運転するの？」

と質^{たづ}問^ねると、

「できますよ、男のすることなら何でも。」

と小癪^{こさく}にして且つ意味ありげな返事。尚々書^{なほく}のやうにして、

「今日は修羅場^{しゆらば}だから運転しからないけれど。」

と言ひ添へた。

真佐子も負けるものかと許り、

「あら、いつぱし言ふぢやない。」

「一丁前のことを？ うふ。」

と笑つて坊やが車をスタートさせれば、古物とは言ひながら出足すばらしく、八時を廻つた東京の街の藍色を、走る、走る。怖い物知らずの速さで駆けて行き、信号が変る一呼吸も二呼吸も前に飛び出す。横に入り斜めに渡つて近道を行く。宛然、奔馬の鞍上にある心地だが、胸の動悸にもかゝはらず、この無鉄砲な操縦者に向つてときぐ、中橋一馬の安否を訊ねるのは娘心。然し応答がたゞ一つ、

「大丈夫です。」

とうなづくのみなのは、きびしい規律の故か、危難を隠さうといふ思ひやりか。

そのくせ本気が串戯か、

「お嬢さん、電話番号教へてよ。」

とか、

「卒業のとき制服下さらない？ スカートも添へて。」

とか、端手ないことしきりに話しかけ、取合つてもらへぬとわかると、

「ちえつ。」

と呟く。勿論その間も荒くれて駈けつづけた車は、小ささまさまの燈火に斑らに染まる夜陰の町の、とある店の前にぴたりと停止り、眼帯の少年は反対側に出てドアを開けてくれる、

「逢引はこの店です。でもね、君と僕は必ずどこかで逢へる。ぢやあね。」

「有難う。またいつかね。」

と真佐子も礼を述べて、

「一寸、待つて。」

と呼び止め、先程から心に蟠つてゐた疑惑を糺す。

「ねえ、教へて。あなたも叛徒のメンバーなの？」

すると男の子は、それには直に答へずに、

「お嬢さん、知らないの？ 近頃は全国の幼稚園に叛徒の組織あるんだよ。アヴァンティは小

学校どまり。」

と洒落たはぐらかし方。

真佐子は明るい笑ひ声をあげて、

「車賃、いゝのかしら？」

子供は片頬に微笑を浮かべながら、

「制服をいただきますに参上ります。もし生きてゐれば。」